

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道府県名	福岡県
-------	-----

I 学校の概要

学校名	太宰府市立水城小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	4	4	4	3	27	38
児童数	153	127	136	137	126	137	13	829	

II 研究の概要

1. 研究主題

**協働する子どもを育てる学習指導法の究明**  
 - 自己課題に基づく発展的な学習指導のあり方に視点をおいて -

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

1年生～6年生・国語  
 これまで研究対象としてきた教科であるとともに、「文章に書かれている内容をすらすら読む、正しく読む力」が、どの教科においても学習を進める基礎となるという立場に立ち、全校児童を対象に、「読むこと」の領域を中心に研究に取り組むようにした。

3年生～6年生・社会  
 これまで研究対象としてきた教科であるとともに、「与えられた課題には積極的に取り組むが、自ら課題を設定し解決していく問題解決的な学習が苦手である」という本校児童の実態から、問題解決的な学習を重視する社会科を3年生からの児童を対象に研究するようにした。

(2) 年次ごとの計画

テーマ  
 自ら課題を見出し、考え、友だちと磨き合いながらよりよく解決していき、「分かった！できた！」という喜びを味わうことができる協働する子どもを育てるために、「基礎・基本を獲得とする学習」「補充・発展させる学習」における「内容構成」、  
 「活動構成」及び「自主的、協働的な学びを支える手だて」のあり方を究明する。

研究の見通し(仮説)  
 「基礎・基本を獲得する学習」、及び個の学力の実態に応じた「内容を補充する学習」「内容を発展させる学習」といった3つのタイプの学習で単元を構成し、以下のような点から工夫を行えば、協働する子どもを育てることができるであろう。

(1) 内容構成の工夫  
 ア 単元における基礎・基本の明確化      イ 学びがいがある教材の開発

(2) 活動構成の工夫  
 ア 単元レベルでの学習指導過程      イ 1単位時間レベルでの学習指導過程

(3) 手だての工夫  
 ア 評価方法の工夫      イ 学習形態及び指導体制の工夫      ウ 板書の工夫

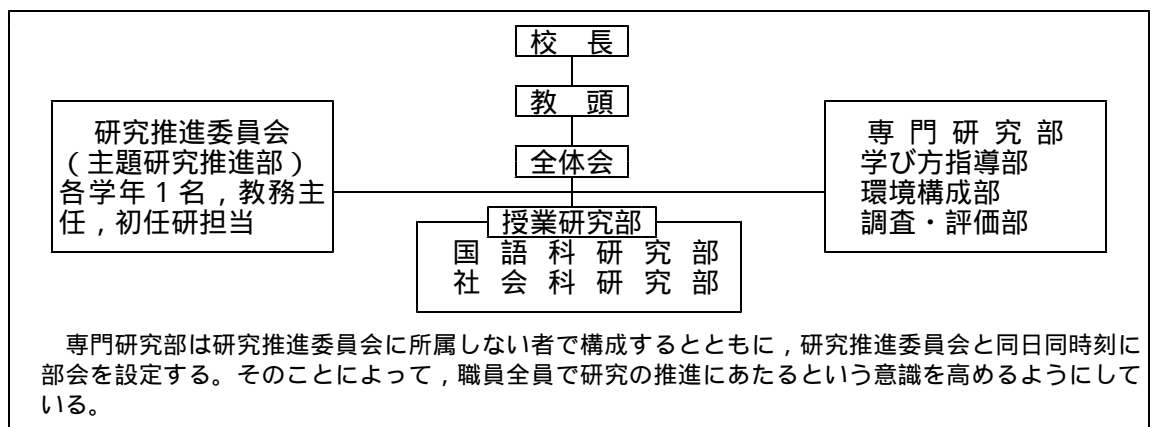
研究の内容・方法  
 (1) 内容構成の工夫について  
 学習指導要領をもとにその単元における基礎・基本を明らかにして目標を設定するとともに、子どもの実態や学習内容などの面から学びがいがある教材を開発、準備する。

(2) 活動構成の工夫について  
 単元を「基礎・基本を獲得する学習」を位置づけた「獲得する」段階、診断的評価を行いコースを自己選択する「ふり返る」段階、「内容を補充する学習」もしくは「内容を発展させる学習」を位置づけた「いかす」段階の3段階で構成する。そして、この3つの段階が、子ども自身が自己の課題を発展させながら学習を進めていく段階となるようにする。また、1単位時間の学習については、本時の内容や方法についての見通しをもつ「みとおす」段階、自分で考え

平成15年度	<p>たり友だちと考えを磨き合ったりしながら学習内容を創造する「つくる」段階、本時をふり返る「たしかにする」といった3つの段階で構成する。</p> <p>(3) 手だての工夫</p> <p>特に、評価と指導の一体化を図るために、毎時間の終末段階に学習内容と学び方の二つの面からの自己評価活動を位置づける。また、単元の「ふり返る」段階においては基礎・基本となる学習内容の定着状況を自ら確かめることができるような診断的な評価活動を行うことができるようにする。指導体制としては、特に「いかす」段階において習熟度別少人数指導ができるような指導体制を組むようにする。</p>
--------	--

平成16年度	<p>テーマ 平成15年度の研究テーマと同じ 研究の見通し(仮説) 「基礎・基本を獲得する学習」、及び個の学力の実態に応じた「内容を補充する学習」「内容を発展させる学習」といった3つのタイプの学習で単元を構成し、以下のような点から工夫を行えば、協働する子どもを育てることができるだろう。</p> <p>(1) 内容構成の工夫 ア 各学習のねらいの明確化   イ 個の実態に応じた教材の開発</p> <p>(2) 活動構成の工夫 ア 単元レベルでの学習指導過程   イ 1単位時間レベルでの学習指導過程</p> <p>(3) 手だての工夫 ア 指導と評価の一体化 イ 個の実態に基づいた多様な学習形態及び指導体制の工夫</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>(1) 内容構成の工夫について 学習指導要領をもとに、その単元における基礎・基本、さらに補充的・発展的な内容を明らかにして目標を設定するとともに、子ども自身が内容や方法を選択することができる教材を開発、準備する。</p> <p>(2) 活動構成の工夫について 本年度と同じ考え方で単元構成、1単位時間の構成を行う。ただし、単元の「ふり返る」段階における診断的評価については、本年度より子どもの主体性を重視した活動となるよう構成する。</p> <p>(3) 手だての工夫 単元の「ふり返る」段階においては基礎・基本となる学習内容の定着状況を自ら確かめることができるよう、自己評価の方法を学年の実態に応じて指導していく。指導体制としては、特に「いかす」段階において、1学級を2つのコースに分けるという方法だけでなく、複数の学級をより多くのコースに分けるなど、習熟度別少人数指導をこれまで以上に柔軟かつ積極的に取り入れるようにする。</p>
--------	---

### (3) 研究推進体制



## III 平成15年度の研究成果及び今後の課題

### 1. 研究成果

以下は、第5学年社会科「わたしたちのくらしと情報」の学習における基礎・基本の定着状況である。

本学習における4観点の到達状況(%) 母数33人

	関心・意欲・態度			技能・表現 (平均)	思考・判断 (平均)	知識・理解 (平均)
	A	B	C			
基礎・基本を 獲得する学習後	57.6	42.4	0	81.8	80.2	82.5
補充する学習後 (16人)	37.5	56.3	6.2	89.5	84.5	89.4
発展させる学習 後(17人)	70.6	29.4	0	90.5	88.6	95.8

上の表から分かる通り、「基礎・基本を獲得する学習」においては、どの観点についても平均点が「おおむね満足できる」の範疇にある。これは、本単元でねらう基礎・基本の内容を明らかにして指導にあたるとともに、本校の社会科部のテーマである「人間の生き方」に焦点をあてた教材化が有効に働いたからであると考えられる。また、「補充する学習」「発展させる学習」によって基礎・基本がさらに定着したことがうかがえる。「補充する学習」においてはくり返しを大切にしたこと、「発展させる学習」においては基礎・基本を活用する内容にしたことが有効に働いたためであると考えられる。

## 2. 今後の課題

上記の表から分かるとおり、「補充する学習」において子どもたちの「関心・意欲・態度」の到達状況だけが落ちている。これは、「補充する学習」の内容については、子どもたちの興味・関心よりもくり返しを重視し過ぎたこと、「ふり返る」段階における自己評価が子ども主体で行われなかったために、子どもが選択したコース内容と興味・関心が一致しなかったことが原因として考えられる。そこで、来年度は、「補充・発展」それぞれのコースの学習内容を子どもの実態から再度吟味していきたい。また、子どもたちの自己評価する力を高め、本年度のテーマである単元における「自己課題の発展」をさらに進めていきたい。指導形態・体制については、本年度は1学級を2コースに分ける少人数指導を行ってきたが、複数学級を対象により多くのコースに分けるなど、もっと柔軟に指導形態・体制を工夫し、日常的に取り組んでいきたい。

## IV 学力把握のための学校としての取り組み

本研究がめざす「協働する子ども」の資質・能力の中核をなす「関心・意欲・態度」の評価については、めざす子ども像を学習指導過程に沿って具体化した内容のアンケートを定期的(5月, 10月, 3月)に実施し、子どもの変容を客観的に確かめるようにする。また、「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の評価については、CRT学力実態テストを実施(5月)して学力を把握するようにしている。

## V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成15年9月30日(火)公開授業研究会において国語科, 社会科それぞれ1学級が授業を公開し, 分科会を行った。  
平成15年12月5日(金)実践交流会において国語科3学級, 社会科4学級が授業を公開し, 研究構想の発表, 分科会を行った。

【新規校・継続校】  15年度からの新規校  14年度からの継続校

【学校規模】  3学級以下  4~6学級  
 7~9学級  10~12学級  
 13~15学級  16学級以上

【指導体制】  少人数指導  T・Tによる指導  
 その他

【研究教科】  国語  社会  数学  理科  
 外国語  音楽  美術  技術・家庭  
 保健体育  その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】  有  無